〔東京家政大学研究紀要　第42集 (1), p.93～99, 2002〕

明治後期の家庭教育における〈お話〉観に関する一考察

是澤　優子

（平成13年10月4日受理）

A Study of "Story-telling" in Home Education in the Late Meiji Period

Yuko KORESAWA

(Received on October 4, 2001)

キーワード：お話，明治後期，家庭教育，幼稚園

Key words：story-telling, late Meiji period, home education, kindergarten

1．はじめに

語られる〈お話〉は，文字をまだ十分に読めない時期の子どもに適した文化財である．絵本やビデオなどが豊富にある現在，子どもたちが物語に出会うのは，まずこれらの視覚的・映像的文化財からであろう．

かつて，親しい大人の口から子どもたちに直接語られた語りの空間―囲炉裏端を囲んだ昔話の世界は，既に私たちの日常生活にはない．今の子どもたちが肉声による語りにふれられるのは，家庭よりむしろ図書館や集団保育などの場であろう．パソコンや携帯電話などインターネット通信技術の進歩は便利さを追い求め，人と人との「コミュニケーション」をかつてない範囲にまでおしひろげた．子どもの遊具に目を向けると，コンピューターゲームの映像はリアリティを増し，動物型ロボットペットなどバーチャル体験を楽しむタイプの玩具が次々に市場に出てきている．このような遊びに関して，身体性や想像力の欠如を問題点として指摘する声もある．

本研究の目的は，人と人との間に機械が介在し，間接体験に拍車がかかる現代社会にあって，語り手と聞き手が直接顔を見合わせ，生の声で語る〈お話〉は子どもの生活文化としてどのような価値をもち得るのかを探求することである．筆者は拙稿において〈お話〉に相当する幼稚園の保育項目「談話」に着目し，その成立と展開を追うことで，明治・大正期の幼稚園教育における「談話」の役割を明らかにするとともに，〈お話〉の導入・方法などに象徴されるわが国の幼児教育観の一端を検討してきた[1)]．

本稿では，日本が近代化を歩み始めた明治期，即ち子ども向けの映像文化財がほとんどなかった時代の家庭教育における〈お話〉に，どのような役割を期待していたのかを考察する．

2．幼稚園教育と家庭教育―教育対象となった幼児

日本の近代化は，国民全体の教育を進めることから始められ，明治5 (1872) 年学制を公布した．それまで封建的な区分の中で，所属する階層や性別に応じて躾けられていた子どもたちは，近代国家を担う国民の育成のための義務教育の対象として一括された．幼児の教育についても，明治9 (1876) 年11月に日本で最初の幼稚園，東京女子師範学校附属幼稚園幼稚園が開設された[2)]．即ち，幼児までもが意図的教育の対象として考えられるようになった．

明治9年（1園）から明治17年に至るまで，幼稚園数は毎年数園ずつの増加にすぎなかった．明治18年に30園，翌19年には38園，明治20年には67園と急増し，20年代に各地で幼稚園が開設される．幼稚園に就園する幼児数は，明治20年には4,239人であったのが，同30年には19,727人となり明治20年の4.7倍となった．同40年には35,235人で明治20年の8.3倍となる．明治30年には関西三市（京都・大阪・神戸）で京阪神連合保育会が成立するなど，明治30年代は幼稚園が着実な発展をした時期（定着期）であるといわれている．

明治32 (1899) 年には，幼稚園のあり方を総合的に決

児童学科　児童文化研究室

めた最初の文部省令「幼稚園保育及設備規程」が制定された.「幼稚園保育及設備規程」では，幼児の心身の「健全ナル発育」及び「善良ナル習慣ヲ得」ること,「家庭保育ヲ補」うことを保育の目的としていた. 幼稚園教育は家庭を視野に入れつつ，子どもの心身の健全な発育や望ましい人格の形成を目指す場であったといえよう.

書名を「家庭教育」とした最も古い文献のひとつと言われる『家庭教育』(金港堂) に，次のような記述がある.

> …幼稚園の教えを受くればとて父母たるものは其子の教育を打棄ててはならぬことなり　何となれば父母の膝下にて心に染み入りたることは善なり悪なり一生涯消えぬということは道理よりひいても実地より見ても疑いなきことなればなり[3]

子どもが両親と過ごしながら得たことは，良くも悪くもその子どもの心に生涯残っているものだから，たとえ幼稚園に通って色々な教えを受けていたとしても，親が子どもの教育を放棄してはならない. そして幼稚園のないところでは両親が「一層心を用いねばならぬ」と説いている.

また，竹島茂郎 (女子高等師範学校助教授) が,「学校教育の目的を達するも達せざるも家庭の心掛一つに存すと云うも過言」[4]ではないと述べている. 家庭教育は，教育の基礎として位置づけられている.

明治39年，上野で開かれた日本初の「こども博覧会」の詳細をまとめた『日本の家庭』(臨時増刊号) において，東久世通禧 (枢密院副議長) は，教育は「国運拡張の根本的事業として最も多く意を用いねばならぬ」ことであり,「ただ学校のみに於いては，到底円満なる発達を期することができない」ので「必ず家庭と連絡をとって補助し合わねばならぬ」と，述べている. 子どもの教育に「善良な功績」をあげるためには，社会，学校，家庭が教育上有益なことを共に進めていく必要があるという[5].

近代国家社会の実現を目指す社会風潮を受けて，家庭は次代の国民を育成する教育力を期待されていた.

3．家庭教育書に見る〈お話〉

(1) お話の意義

柳田国男らが「昔話は，娯楽の一つであり重要なる教育の手段であった. 我々の想像力は，これによって培われ，知能と情操は，これによって養われた」[6]というように，伝統的社会において，昔話は民間教育やしつけの手段として大切なものであった. 近代化を目指す時代，家庭における〈お話〉はどのような価値を見出されていたのであろうか.

明治20年に出版された『家庭教育』(金港堂) には「幽霊怪物のはなしは子供の害となる事」という項がある.

> 恐ろしきはなしをきかせられ又は不意におどされなどして物事に恐るゝことの癖となるときは只臆病ものと成るばかりならず学問の修業にも芸能の研究にも大なる妨げとなるものなれば父母はすべての子供の驚き恐るゝ様なることを見聞きすることをつゝしむべし幽霊怪物のはなしは如何なる場合にもなすべからず…[7]

親はいかなる場合も「幽霊怪物」話を子どもにしてはならないと強く説き，子どもの恐怖心を煽るような話は，子どもを臆病にするだけでなく，学問修業の妨げになるという. ここでは，子どもの学問修業や精神発達に影響を与えるものとして〈お話〉を捉えている.

明治27 (1894) 年に民友社が発行した『家庭教育』には，

> …小児に於ては耳学問の効益著大なるものとす，小児は書物よりも談話(はなし)を喜ぶものなれば，父母は之に応じて教育となる談話を与ふるを務めとすべし…(中略)…談話は単に寝せつくる為なりとて，意味なき事，利益にならぬ事を試むべからず，必ず一定の方針を定め，男女の異性及び各児童の性質に応じて其種類を選ばざるべからず，又此方より談話を試むるのみならず，時々児童にも談話の荒筋を繰返さするも必要なり[8]

幼い子どもに話を聞かせることは、「耳学問」となるので,「教育となる談話」を聞かせることが親の努めであるという. 寝かしつけるための手段だからと簡単に扱わずに，子どもの性質に応じた話の選択をして，聞いた話を理解しているか否かを時々子どもに確認することも必要だと説いている. 即ち，親が子どもに話をすることを，教育と結びつけている.

明治34 (1901) 年に利根川與作が著した『家庭教育法』「説話」の項には，教育者としての親の努めが次のように説かれている.

…児童をして完全なる人物となさんとせば，何ぞ時を惜しむを要せん，児童を教育するは父母の任なり，学校は父母の依託を受けて僅に其の一部の教育に従事するのみ，之を思はゞ父母たるものは，時々刻々も，児童の教育を忘る可からざるなり．

大人の説話は，児童の心意を拡張するのみならず，其の行為を正道に導き，又彼等をして談話を模倣せしめ，精神発達の要素たらしむ可し，故に極めて理解し易き言語を以て，児童の心意発達に適する程度に於いて談話を試む可し．[9]

大人の〈お話〉は子どもの「心意を拡張」し「行為を正道に導」く．談話の模倣をさせることで，子どもの精神を発達させるので，発達に適した話をわかり易い言葉で話して聞かせるよう述べている．

以上のように，談話は教育的側面からその価値をはかられ，子どもの精神発達に影響を与えるものと捉えられていた．

(2)話の題材

先にあげた『家庭教育』(民友社)には，

或家の母親は毎日毎夜談話を試むる故に談話の種に困却せりという，これは注意の足らぬ処なり，世界の事森羅万象何事にても談話の種とならざるものなし，談話者が少しく注意と観察を広く且つ精密にすれば，軒に滴る玉水にても，火に飛び来る夏虫にても直に談話の種となるなり[10]

つまり，身の回りのあらゆることが「談話の種」であり，毎晩話をせがまれて話すことがなくて困るというのは，話すものの注意と観察が足りないためだという．そして，日本の子どもは一般的に「武勇と珍奇の談話」を好むとして，「加藤清正と虎，牛若丸と弁慶，曾我兄弟の夜討，豊大閣の朝鮮征伐，岩見重太郎の怪力，大江山の鬼征伐，桃太郎の誕生，かちかち山，文福茶釜，猿蟹合戦，舌切雀等」[11]の話を挙げている．

『家庭教育法』には，「我が国にて行はるゝ童話、桃太郎、浦島太郎等は皆想像作用の材料となるものにて，将来小学校に入る後教授上の助となる」ことが多く「想像は思想の前駆なれば、児童が談話を好むを利用して，適宜想像の練習」[12]をするとよいと書かれている．童話や昔話は，想像力を培うとともに小学校教育の基礎を培うものとして，評価されている．話材については，

…談話の材料としては，自然物と人工物とを問はず，家の内外に充満し，皆児童未知のものなれば，何を採て談話をなすも興味を与へ見解を広む可し．又時々，童話を授けて，記憶想像の助となす可し[13]

として，「家の内外に充満」しているという．「興味を与え見解を広め」る話に加え，「記憶想像」の力を培う童話を聞かせるように勧めている．そして，興味ある童話として，以下の16話を挙げている．

桃太郎，猿蟹合戦，松山鏡，花咲爺，舌切雀，
かちかち山，瘤取り，浦島太郎，物臭太郎，
一寸法師，金太郎，鼠の嫁入，文福茶釜，
安達ヶ原，羅生門，俵藤太

これらの話に日本御伽噺の中から興味ある話を加えれば，「材料の欠乏を告ぐる憂いなし」という．

ちなみに，東基吉(東京高等師範教授)が編纂した『家庭童話　母のみやげ』[14]には，次の童話が載せられている．

亀の悪戯，狐と猫、福の神と八蔵，雛の葬式、
狼の仕損じ，半助の仕合せ，動物の寿命，鼠の嫁入り，
殿様の改心，杢助の誕生日，熊の讐討，
鼠と烏とおむすびの話，小人の話，狼と狐，
漁夫の御褒美，狐の恩返し、烏の御話，不思議の着物，
ぶつぶつ老爺，百合姫，鼬鼠の起源，子狐の仇討，
今度は何を食べよう，イソップの話

家庭教育書で推奨される話材は，昔話，偉人伝・英雄伝，イソップ寓話，海外の昔話の翻案，創作童話など幼稚園教育に取り入れられた話材と共通している．[15]また，日常生活のすべてが「話の種」になるという主張が共通して見られる．

(3)お話と近代化―科学的な視点―

『家庭教育』(明治27年)では，「一般の児童の嗜好に膾炙したるが如しと雖も，中には妄誕虚構怪力乱神少しも児童の教育ならざるものあり」[16]として，従来子ども

が喜んで聞いていた話の中にも「児童の教育」にならない話があるといと言い，迷信俗信より科学的に事象を説明することの必要を説いている．例えば，

…電ひらめきごろごろと雷鳴り渡る時すらすぐに学問の種となる，心掛けよき談話者は恐怖せる児童等に，雷は神にあらず，獣にもあらず，空中に於いて電気の作用によりて起こるものなれば決して臍を掴まるゝの恐れなき事，併し人畜が此電気に触るれば命を失う事…[17]

電気には恐ろしい面もあるが，電気を利用して（電信，電話，電灯，鉄道等）文明の利器を発明した事，電気の原理，避雷針を発明したフランクリンの話，フランクリンとワシントンがアメリカ独立戦争で巧妙を立てた事など，「実用的教訓等」を話して聞かせれば，子どもは喜んで耳を傾けるという．また，雑誌『家庭教育』（由分社）の「趣味ある問答」には，「山芋は鰻になり，柳は幽霊になり，腐草が蛍になる」と信じているような人間の「心の中の不思議とか迷信とかいう分子を時々追い出して戴こう」[18]と思うと書かれている．そして，「草葉にはなぜ露が多い？」「光が強くて熱くない燈火は無きや」などについて理科教育の立場から答えを示している．

4．新しい家庭像と家庭教育

明治維新による政治，経済など社会の枠組みの変化にともない，人々の生活は変貌する．家庭や育児についての考え方にも，変化が見られるようになる．明治20年代には封建的な家制度から独立し，夫婦を中心とする近代的な家で子どもの養育にたずさわる新しい婦人像を啓蒙する書物が発行されはじめる．

例えば，明治25(1892)年から明治31(1898)年まで発行された『家庭雑誌』（家庭雑誌社）は，「おそらく最も早く家庭の語を冠して観光された」とおもわれる民友社系の婦人啓蒙雑誌であり，「欧米文化の影響を受けた都市の中上流市民を読者に予想し」[19]て新中間層の憧れる価値観を先取りしていた雑誌であった．

その創刊号は，「婦人は開化の母」であり，「健全なる人民は健全なる揺籃（家庭）に育」つのであるから，「新人民を育さしめんとせば，第一着に叫破せらるべきは家庭の改革ならずや」と説いている．さらに家庭の教養(環境)こそが子育てには重要であり，「父母はまず自家を健全に」し「母たる者は殊に自ら修養すべき」[20]であると論じている．「国家意識にめざめた良妻賢母の創出こそが女子教育に期待され」[21]ていた時代である．明治31(1900)年には『婦女新聞』が週間で発行され昭和15(1940)年まで続いた．また，明治36(1903)年には堺利彦等が社会主義の立場から家庭の意義を論じた『家庭雑誌』（由分社）が発行され明治42(1909)年まで刊行された．竹島茂郎は『模範教育我家の新家庭』（明治38年）において「家庭若しくは家庭教育という声漸く喧しくある今日」，「女子の本務は家庭をととのえて子女に完全なる教育を施すにあり」[22]と述べている．

〈お話〉が家庭教育の一部を担うべく期待されていたことは，先に示したとおりである．そこには，〈家庭で子どもにお話しを聞かせる母親〉のイメージが作り出されている．例えば，1903年から1909年まで刊行された『家庭雑誌』（由分社）[23]に，その名のとおり「お母さんのお話材料」が数回掲載されている．その他の号にも母親が子どもにお話をするための話材が載せられている．その中の主なものを挙げておく．

- 「オッカさんのお話材料」＝子守り天女とお菊坊
  第1巻第9号（明治36年12月）
- 「小供に聞かせる話」＝お籠の林檎
  第3巻第1号（明治38年1月）
- 「おカアさんのお話材料」
  ＝アメリカ合衆国フランクリンの逸話
  第3巻第6号（明治38年6月）
- 「お話の材料」（トンチ話2話）
  ＝けちん坊のイギリス人の話，小僧と飯屋の話
  第3巻第8号（明治38年8月）
- 「オカアさまのお話材料」＝グリム童話 KHM71「六人男，世界をのし歩く」の翻案話　第3巻第10号（明治38年10月）
- 「こどものくに」＝強い裁縫師（したてや）（一）
  第5巻第9号（明治40年7月）
- 「こどものくに」＝強い裁縫師（したてや）（二）
  第5巻第10号（明治40年8月）

『家庭童話　母のみやげ』の広告文（図1）[24]からも語り手の役割を担うこと名なった母親の姿が読み取れる．

おっ母さん，昔噺を聞かせて頂戴！とは毎晩可愛い子供たちの口から聞く所ではありませんか？…(中略)…

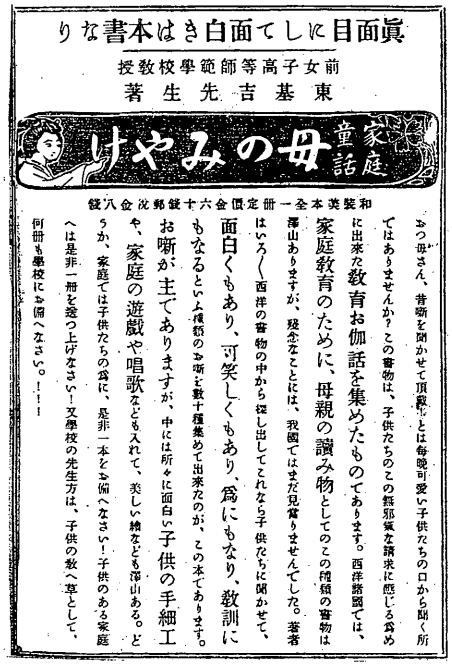
りな書本はき白面てしに目面眞
授教校學範師等高子女前
著生先吉基東
家庭童話
けやみの母
和裝美本全一冊定價金六十錢郵況金八錢
お母さん、昔話を聞かせて頂戴ッとは毎晩可愛い子供たちの口から聞く所ではありませんか？この書物は、子供たちのこの無邪氣な請求に應じる爲めに出來た教育お伽話を集めたものであります。西洋諸國では、家庭教育のために、母親の讀み物としてのこの種類の書物は澤山ありますが、殺念なことには、我國ではまだ見當りませんでした。著者はいろ〳〵西洋の書物の中から探し出してこれなら子供たちに聞かせて、面白くもあり、可笑しくもあり、爲にもなり、教訓にもなるといふ種類のお噺を數十種集めて出來たのが、この本であります。お噺が主でありますが、中には所々に面白い子供の手細工や、家庭の遊戯や唱歌なども入れて、美しい繪なども澤山ある。どうか、家庭では子供たちの爲に、是非一本をお備へなさい！子供のある家庭へは是非一冊を送つ上げなさい！又學校の先生方は、子供の教へ草として、何冊も學校にお備へなさい。！！！

図1 『母のみやげ』広告文

西洋諸国では家庭教育のために，母親の読み物としてのこの種類の書物は沢山ありますが…

家庭教育書には，子どもの教育を母親の努めとして意識させる言説が繰り返し説かれている．「教育する母親」という観念は「啓蒙思想家によって欧米から輸入されて以来，男女同権の中にも良妻賢母論の中にも生きつづけ，両者の共通分母となっている」[25]という．

語り手の役目が，祖父母ではなく母親に課せられるようになったことは，単に語り手が祖父母から親に移ったということだけでなく，子どもの教育を母親が家庭で担うことになったことをあらわしている．そして〈お話〉は，母親が家庭教育を行う手段として捉えられている．

5．おわりに

本稿は，日本が近代化を歩み始めた明治期の家庭教育において，〈お話〉に期待されていた役割を明らかにしようと試みた小論である．そこで，家庭教育が提唱され始める明治20年代以降の家庭教育書から，〈お話〉に関する言説に絞って明治後期のお話観の一端を考察した．

伝統的社会では昔話などの口承文芸が，子どもや民衆の娯楽的・教育的側面を担っていた．言いかえれば，言葉や体による表現や体験による「教育」が，家庭や地域社会の中で日常的に成り立っていた．

明治期は，早急に近代的な国民国家を育成するために学校制度を成立させた時代である．学校教育のみならず家庭教育の重要性が強く説かれ，且つ，家庭は知識や道徳的価値観などにおいて学校教育を補うものとして位置付けられていた．

明治後期の家庭教育書に紹介されている〈お話〉の題材は，昔話、御伽噺、偉人伝、英雄伝、創作話，外国童話の翻案など，多岐にわたっている．そこで推奨されている話は，当時の幼稚園教育に取り入れられていた話材とほぼ重なる．また，「話の種の宝庫」である日常生活を子どもと過ごす親，特に母親に対して，注意力，観察力，知識に裏付けられた話術を求めている．ここでは，手仕事をしながら囲炉裏を囲んで語る，或いは寝かしつけながら語るというイメージは払拭されている．

大人が子どもに話をする事は，耳から知識を注入するという点で優れた教育手段であり，想像力や精神発達など小学校教育の基礎を培うものとして評価されていた．〈お話〉は，子どもの精神的発達や教育に有益か否かという視点からその価値を図られる傾向にあった．そのため，子どもが好んで聞いている話についても，教育的観点から問い直されている．

殊に，教育者たる親が迷信や俗信を排除し，科学的視点から子どもに物事を説明することが必要であるという考え方には，近代的〈お話〉観の一端が象徴的にあらわれているといえよう．

注

1）是澤優子「幼稚園教育における〈お話〉の位置付けに関する研究　その1」 東京家政大学研究紀要第39集(1),「幼稚園教育における〈お話〉の位置付けに関する研究　その2」東京家政大学研究紀要第40集(1)を，参照されたい．

本研究における〈お話〉という語句の定義は，昔話，寓話，童話など伝承、創作物語の如何にかかわらず，大人が子どもに話す，子どものための「物語」の総称とする．

2）これは，政府によって急速に進められた海外文化移入の思潮に乗って，フレーベル（Friedrich Frobel）のキンダーガルテン（Kindergarten）を輸入しようとしたものであり，当時の文部大輔（大臣）田中不

二麿，女子師範学校摂理（校長）中村正直（敬宇）らの熱意と尽力により開設された．明治4年横浜に作られた「亜米利加　婦人教授所」，明治8年京都府柳池学校付設「幼稚遊嬉場」のように，子どもを集団で保育する施設は存在したが，いずれも数年で廃止された．附属幼稚園は初めて文部省が認可・設立したものであるということから，これをもってわが国の幼稚園の誕生とする人が多い．

3）小池民次・高橋秀太輯『家庭教育』 金港堂 1887（明治20年） p6
（『家庭教育叢書第1巻　クレス出版　1990）

4）竹島茂郎『模範教育我家の新家庭』宝文館 1905（明治38年） p12

5）東久世通禧「教育の社会的一進歩」『日本の家庭』第3巻第4号　臨時増刊号　同文館 1906（明治39年） p2

6）『定本柳田国男集』第6巻　筑摩書房　1968

7）前掲書3に同じ　p120

8）『家庭教育』民友社　1894（明治27年） p68-69

9）利根川與作『家庭教育法』　1901（明治34年） 普及舎　p103-105

10) 前掲書7に同じ　p70

11) 同上　p73

12) 前掲書9に同じ　p90-91

13) 同上　p104-105

14) 東基吉『家庭童話　母のみやげ』 同文館 1905（明治38年）
イソップの話は「蛙と牝牛」を始め10話掲載されている．その他に，一口噺，室内遊戯，紙細工の方法などを載せている．明治40（1902）年にフレーベル会が編纂，出版した『幼児教育談話材料』は，本書が基になっていると推察される．

15) 前掲書1に同じ

16) 前掲書7に同じ　p73

17) 同上　p70

18)『家庭教育』 第2巻第10号　由分社　明治37年
（『復刻版　家庭雑誌』全6巻　不二出版　1983）

19) 石田雄『現代政治の組織と象徴』みすず書房　1978 p290

20)『家庭雑誌』第1巻第1号　家庭雑誌社 1892(明治25年)　p32

21) ひろたまさき「文明開化と女性解放論」『日本女性史』女性史総合研究会編　東京大学出版 1982　p11

22) 前掲書4に同じ　p1-2

23) 前掲書18に同じ

24) 広告文は大村仁太郎編述『教育寓話我子の美徳』（同文館　明治38年）に掲載されている．

25) 米田京子「近代的母性観の受容と変形―『教育する母親』から『良妻賢母』へ」『母性を問う　歴史的変遷　下』脇田晴子編　人文書院　1985　p128

参考文献

・小山静子『良妻賢母という規範』 勁草書房　1991
・女性史総合研究会編『日本女性史第4巻　近代』東京大学出版会　1982
・脇田晴子編『母性を問う　歴史的変遷　下』人文書院　1985
・仲新編　日本子どもの歴史5『富国強兵下の子ども』第一法規　1977
・山住正巳『日本教育小史』　岩波書店 1987
・小嶋秀夫『子育ての伝統を訪ねて』　新曜社 1989
・宮本常一『宮本常一著作集』第8巻　未来社 1969
・日本保育学会編『日本幼児保育史』第2巻　フレーベル館　1968

付　記

引用文中には、一部現代仮名遣い，常用漢字に改めたところがある．また，読みやすいように，適時，句読点，ルビなどをつけている．尚，特にことわりのない限り，引用文中のカッコおよび傍線は引用者によるものである．

Summary

This paper is a consideration of the expectations surrounding the role of stories and story-telling in home education in the late Meiji period. The Meiji period (1868-1912) was a time when the importance of home education to back up school education was forcefully argued, in order to help the urgent development of a modern nation-state. In traditional society, story-telling had the role of being a source of amusement and education to children and ordinary people : but from the Meiji period onwards, the focus was increasingly put on the didactic purpose of story-telling. The argument was made in particular that superstition and folk belief should be eradicated, and that stories should be used to explain and teach things to children from a scientific, rational point of view. The view of story-telling as being a means to help Japanese people modernize is symbolized in this stress on science and rationality.